

## 誓子と子規

### Ⅰ 初学の誓子の子規理解Ⅰ

柴田 奈美

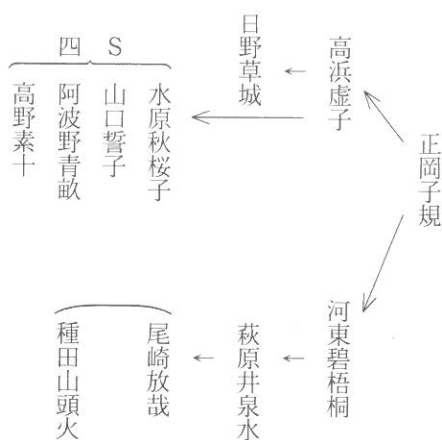
#### 要約

現代俳句の革新者である山口誓子が、正岡子規をどのように理解し、自分の俳論に活用しようとしたのか、ということ明らかにすることを研究目的とする。本稿では、初学の頃の誓子について考察する。中心研究対象は、誓子が「ホトトギス」に投句を始めた大正九年から「ホトトギス」を脱会した昭和十年の間に執筆された論文中、子規に言及した論文七本である。この時期の誓子は、子規について月並俳句を打破した革新者として評価していた。しかし、「写生」「季」については、誓子の自説にかなり引きつけた解釈の仕方であり、子規の実践を伴いつつ深めていった「写生」、実践に即して幅をもたせた「季」の解釈については、批判的であった。「ホトトギス」脱会後は、誓子をはじめとする新興俳句運動を子規の革新運動に直接結びつけ、その運動が同質のものであるということ主張する意図のもとに、子規の革新運動の内容を具体的に挙げ、それを大きく評価した。

キーワード 「ホトトギス」「写生」「季」「俳句革新運動」

## はじめに

近現代俳句史を簡単に示すと、次のようなものである。



山口誓子の直接の師は高浜虚子であるが、のちに「ホトトギス」を去り、新興俳句運動の旗手ともなった誓子に、近代俳句の革新者である正岡子規の革新的な要素が多分にあったことは、容易に推量できる。本稿では、「ホトトギス」に投句を始めた大正九年から、「ホトトギス」を去った昭和十年までの誓子の子規に言及した論文を中心資料として、初期の誓子が子規をどのように理解していたのか、また、子規のどの点を自分の俳論に活用しようとしていたのかを明らかにしたい。

昭和十年の時点で区切りをつけたのは、「ホトトギス」を脱会することによって俳論の述べ方に変化が見られるのではないかと考えたためである。<sup>注①</sup>

## 一 誓子俳句の出発

山口誓子の俳句の出発は、大正九年十月の京大三高俳句会の句会においてなされたといっただよいであろう。

誓子は俳句の入門期について、次のように回想している。

「当時の私に影響を与えたのは、何と云っても野（鈴鹿野風呂）・草（日野草城）の句風であつたが、その他には、紅酔・涙紅・夢仙などの、いままでの俳句にはなかつた感覚の新鮮な句風を挙げずにはゐられない」<sup>注②</sup>。

「始めて出たその句会（京大三高俳句会）に葡萄といふ題が出て草城の句は、

葡萄含んでもの云ふ唇の紅濡れて

といふのであつた。私はそれまでにこのやうな清新な句を見たことがなかつた。

草城の句にも、啄木で知つたやうな反伝統があり、いままでの俳句の詠はなかつた新世界があつた。

私は啄木から草城に乗り替え、本格的に俳句の門に入ることを決心した。『ホトトギス』への投句もはじまつた<sup>注③</sup>」。

特に、日野草城の句にみられる感覚の清新さに魅かれ、さらにそこに「反伝統」性を感じて俳句の世界に導かれた誓子であった。

京大三高俳句会のメンバーは、鈴鹿野風呂・日野草城をはじめとして、高浜虚子の主宰する「ホトトギス」に所属していた。そこで、誓子もほどこなく「ホトトギス」に投句を始めるようになる。

「反伝統」性に魅力を感じて俳句を始めた誓子であったが、当時の虚子は、凡兆の「長々と川一筋や雪の原」の句について、元禄の幼稚な主観的傾向の句の中で、群を離れて景色を叙している。自分はこのような句を俳句の大道を歩いていると考える、と客観的な写生の句を提唱していた。<sup>注④</sup>

さて、誓子が「ホトトギス」に初入選したのは、大正十年八月号においてである。作品は、

暑さにだれし指悉く折り鳴らす

である。誓子はこの句について、

「変った句である」<sup>注⑤</sup>「無造作で、何ものにもとらわれない、自然兒的なところがある」<sup>注⑥</sup>

と自解している。

暑さにだれているのは、心も体もだが、特に身体の一部「指」に限定して表現した点が、「変った句」という自解になったものであろう。

指の関節を折って、ポキポキ鳴らすのはよく見かける行為であるが、掲句のように表現したことによって、暑さにだれた心も体も、指を悉く折り鳴らすことで、引き締めようという作者の気持ちが強く伝わってくる。

大正十六年六月号の「ホトトギス」に

学問のさびしさに堪へ炭をつぐ

という有名な誓子の句が見られるが、この「さびしさに堪へ炭をつぐ」と詠った、情を湛えつつ情に溺れぬ誓子俳句の源を、この句に感じることができることができる。

ところで、誓子が初入選した大正十年八月号の「ホトトギス」の巻頭作家は池内たけしであり、

麦藁を焚き放したる煙かな

麦藁をしたゝか積みて空家かな

など、七句が掲載されている。虚子の客観写生の理論を忠実に実践したものであった。

誓子が魅かれていた日野草城の場合は、二句の入選で、

欄に置く夏瘦の手や船微動

揉瓜や相透く縁のうすみどり

など、平凡な写生句ではなく、感覚的な句である。

誓子の自句（初入選の前掲の句）に対する「変った句」という自解には、たけしをはじめとする当時の「ホトトギス」の客観写生句になじまぬ句、という自負の気持ちも窺える。

このように、誓子の「ホトトギス」での出発は、はじめから虚子の客観写生の理論からはずれていた。

しかし、大正十一年三月、高浜虚子という偉大な俳人に直接会い、東大入学を契機に句会で虚子の指導を直接受けることによって、誓子の俳句熱自体は、高まっていった。

## 二 誓子の俳句観と近代俳句史観

大正十一年に東大法学部に入學した誓子は、西田幾多郎・土田杏村の哲學書に親しんだ。特に杏村哲學については、のちに

「杏村に一貫する現実の世界と価値の世界とを峻別する考え方は私の芸術至上的な考え方を助長した」<sup>1)</sup>

と述べており、初學のころから虚子の俳論とは別に、自分なりの芸術観・俳句観を形成しつつあった。

誓子が初めて出席した「雜詠句評會」（「ホトトギス」大正十四年十二月）の中に、既に次のような句評が載っている点に注目したい。

風色やてら／＼として百日紅 花蓑

という句に対して、

「かういふ句を見ると芸術といふものが、現実の世界ではなくして、意味の世界であり、すなわち模写ではなく、構成であることを切に感じる次第であります」

と述べている。大正十四年の時点において、既に俳句を「現実の世界」に対する「意味の世界」としてとらえ、その世界を創る方法として「模写」に対する「構成」を挙げているのである。

昭和六年から、誓子は「写生構成」論をしばしば説いているが、その端緒がここに見られる。

また、同じ号の「夕風や仏動も真つ裸」の句の批評にあたって、誓子は

「いゝ芸術作品に於てはその個々の描写は各々個性を表はしな

がら、全体の統一を目指して居ります」。「この全体的統一が、とりもなほさず、作家の人格であ」る

と述べている。

このように、「意味の世界」の構築、作句方法における「構成」、個々の描写が目指す全体的統一といった俳句観が形成されつつあった大正十四年に、誓子は「ホトトギス」に「俳壇の趨移を論ず」（七月号）を発表している。この論文に、誓子の近代俳句史観がよく述べられている。その考え方は、ヘーゲルの弁証法を用いているところに特色がある。

まず、子規の開拓した①「純客観句」の時代があり、その反動として虚子の②「主観尊重」時代が生まれた（大正四年四月～大正六年八月）。この主観重視の傾向が、さらに新傾向運動の影響を受けて、現実を離れ、熱情に走りすぎた③「浪漫主義」。そのため、その反動として虚子は「平明余韻」の句を理想として、④「客観写生」を唱えた。しかし、実際にはそれは「平明」のみの時代であり、「余韻」を伴う句、即ち⑤「新浪漫主義的傾向」（熱情を伴った平静）を、これから目指すべきである。

以上のように、誓子は近代俳句史を説明している。

これは、「平明余韻」の句を提唱する虚子の理論を認めつつも、実際は「平明」の句のみが作られている現「ホトトギス」俳壇を批判したものである。

しかし、このことは虚子への直接的な批判とはならず、次のように誓子は説明する。

「先生は其の第一の階梯に於て主観が其の時代の基調であるとされながら潜在的に客観の尊重すべきことを高唱された。それが顕在的となつて第二の階梯が形成された。それは、既に述べたる如く伸びんとして先づ屈したる平明客観時代であつて、そこには平明余韻なる究極の総合的理想が含まれてゐたのであつた。

然れども理想の実現は短日月にこれを為すことを得ぬ。必らずや段階的發展を追はねばならぬ。先生が熱情時代の反動として平明余韻を理想とされながら、先づ平明時代を築き上げられたのはまことに用意周到であつたと云はねばならぬ」。

そして、次のように自己の主張である「主観の尊重」を力説し、眼前の反動時代、すなわち客観写生のみを尊重する態度を批判している。

「所詮文芸は主観を主潮として流れなければならぬことはかかる難者を俟たずして既に自明である。文芸が主観の大海に注がんとする為には客観の支流を呼び、之を綜合していよいよ主観の主流を拡充しなければならぬ。客観を呼びこれを綜合することによつて主観はより高き祭壇に祀らるゝのである」。

「この大勢を發生学的に見ることなく、眼前の反動時代をのみ長物視する態度は甚だ私の遺憾とするところである。来るべき理想郷は新浪漫主義的傾向を帯びるところのものである」。

「芸術の世界のみが真に個性に生きるものであるが故に、作家は其の創造性を十分に發揮し、自己の強い清新な主観を以て芸術上の真を掴まうとする。然し主観の權威を主張するにしても、それは不羈奔放な噴火山的のものではなく、沈静の態度を以て自然

人生を達観し、そこに内在する生命に触れようとするのである。自然主義的傾向の如く事実を出発点としながら自然主義的傾向がいまだ窺ひ知り得なかつた事象の真髓を直感しようとするのである」。

このように、俳壇を流動的に眺め、現在の「ホトトギス」の俳句史における位置を見定め、虚子の理論を自分の俳論に活用しつつ、自分の進むべき方向をしっかりと把握していた誓子であつた。

### 三 誓子の子規理解

このような俳句史観を抱いていた誓子は、近代俳句の革新者であり、虚子の師でもあつた子規を、どのようにとらえていたのか。

誓子の子規評価が最初に述べられた論文は、「俳壇の趨勢を論ず」（「ホトトギス」前出）である。その後、次のような論文が発表された。

- 「助言」（「ホトトギス」昭和二年三月）
- 「季節の挨拶」（「ホトトギス」昭和六年一月）
- 「ホトトギスの人々とその主張」（『俳句講座』第八卷 改造社 昭和七年十二月）
- 「俳句写生論の変遷」（「俳句研究」昭和九年十二月）
- 「子規以後季題観念の変遷」（『俳句作法講座』（二）改造社 昭和十年十月）
- 「子規の『俳壇時評』」（「俳句研究」昭和十年十二月）

以下、それぞれの論文における誓子の子規理解のあり方を明らかにし、考察する。

(1) 「俳壇の趨移を論ず」(大正十四年七月)

ここでは、

「近代俳句は月並破壊の啓蒙運動によつて樹立された。其の運動は子規居士によつて代表さるゝ」。

と述べ、子規を月並俳句破壊の啓蒙者として評価している。そして、

「子規居士は小主観を喜ぶ月並俳句に対する反動として客観趣味を鼓吹した」

「高く掲げられた旗幟が客観写生であつた」

と、「写生」を月並俳句打破の方法であることを指摘している。しかし、ここでは虚子の唱えた「客観写生」と子規の「写生」とを混同している。

この子規の「写生」については、

「概念的ではなく経験的に、抽象的ではなく具象的に、典型的普遍的ではなく個体的特殊を描かうとした」点において史的に大きく評価し、

「子規居士の為に之は極めて重大な意義のある頓悟」、「子規居士の前に新たに芸術の新天地が開けた」

と述べている。しかし、その子規の「写生」や俳句観に対する誓子の理解は、次に述べているように一面的なものであった。

「其の写生は単なる模写主義に過ぎなかつた。自然の忠実な描

写がただちに真の芸術であると考へられた」。

(2) 「助言」(昭和二年三月)

右のような誓子の子規理解は、この論文においてもなされ、

「子規居士の写生は自然の忠実なる模写といふことに尽きる」と断言した。そのうえで、それは月並俳句打破のための「一の転換運動として採用された」とする。

このように、写生の意義を認めつつも、

「写生とは自然の世界に於ける事情のあるが俚の再現である」。  
「自然の世界はたゞあるが俚の世界である。所謂『ある世界』である」。「かゝる自然の事象のあるが俚の再現たる写生はそれ自身何等芸術として主張すべきものを持たない」。「写生は芸術の為の準備としての貢献を持つ」のみで、「デッサンにとゞまるといふ意味である」

と述べ、子規の写生の限界を説いている。

誓子は、前項で述べたように、現実の世界と価値の世界とを区別して考えた。この論文では、

「写生とは自然の世界に於ける事象の言語への翻訳にすぎず、  
「芸術の世界に於ける事象の言語への翻訳は芸術に於て所謂表現と呼べるゝところのものである」。「表現は価値の言語的翻訳であり、写生は事実の言語的翻訳である」

と述べている。ここでは、子規の写生論中にある、次のような写生における取捨選択・巧みな形状配置といった、作者の主観の働きの部分

が切り捨てられている。

「(写生においては) 少くも天然の実物を見て起すだけの感を起すべし。否実物を見るよりも更に美なる感を起すことさへ少からず。是れ其形状配置の巧なるにも因るべけれど又周囲の不愉快なる感を起すべき者無きにも因るべし」。「純粹の写生にも猶ほ多少の取捨選択あるをや」(「明治二十九年の俳句界」 「日本」明治三十年一月七日)。

### (3) 「季節の挨拶」 (昭和六年一月)

これは論文ではなく、自分の俳句観を断片的に羅列したものである。その中に、次のような表現がある。

- 「季物は造化を象徵する (俳句の自然に於ける象徴的關係)」。
- 「部分は全体を象徵する (俳句の観照に於ける象徴關係)」。
- 「客観は主観を象徵する (俳句の表現に於ける象徴關係)」。
- 「俳句の配合体時代は既に過去に属せんとしつつある」。
- 「俳句は象徴時代に更正せんとしつつある。そこにこそ俳句の『近代性』がある」。

このように「象徴」という言葉をつかって、俳句の新しさを主張したうえで、

「子規の第一次の俳句革命は『写生主義』と『客観主義』の樹立にあつた」。「虚子の第二次の俳句革命は配合觀念の克服に依る象徴觀念の樹立にある」

と述べ、子規の場合は方法の革命、虚子の場合には觀念の革命であると、

二人の俳人の史的意義をとらえている。

### (4) 「ホトトギスの人々とその主張」 (昭和七年十二月)

この論文中、「三、結社ホトトギスの主張」で、誓子はまず、俳句を如何なるものとして觀念するかという「俳句觀念」の問題について採り挙げる。この点において子規については、次のように述べている。

「子規の革命は、その技術のすばらしさにも拘らず、又過去の滑稽趣味、閑寂趣味を一応清算したにも拘らず、其の『俳句觀念』は配合趣味の觀念―季題趣味の摇曳を標識として、季物と或る事を配合せんとする觀念―を終に脱却し得なかつた」。

これに対して、このような配合趣味の觀念を完全に撥無したのが、「花鳥諷詠」を唱えた虚子であるとする。誓子は、

「花鳥諷詠の觀念は、『花鳥風月』のみを志向し、純粹な『花鳥風月』を純粹に『花鳥風月』として諷詠する。純粹に諷詠するとは、諷詠することそのことのために諷詠することである。そこに何等の異物をも挿入することを許さないことである」

と、虚子の唱える「花鳥諷詠」論を、自分の論にかなりひきつけた解釈をして肯定しているのである。

虚子の花鳥諷詠論は、季題の尊重から導き出されたものである。子規の方が、有名な「夕顔」論争からもわかるとおり、季題趣味を排除しようとする考えをもっていたのである。

「俳句觀念」についての、この子規批判は、自分にひきつけて「花鳥諷詠」を解釈することにより、自説を「花鳥諷詠」という虚子の言

葉を使って主張する中で行われたものである。

次に、句作態度としての「写生」については、まず、

「日本俳諧史は畢竟、現実を尊重したかどうかの歴史である」と、自分の俳諧史観を打ち出し、次のように具体的に解説している。

○ 芭蕉は現実を尊重した。

○ 其後子規に至る迄の時代に於ては、大体の傾向として現実を尊重しなかった。所謂月並み俳句にあっては、現実をすっかり忘却した。

○ 子規は再び現実を尊重する態度を採った。子規の俳句革命は「天然を写せ」の主張である。

○ われわれ「ホトトギス」俳人の句作態度は、子規の写生説を継承して、現実の尊重を旨とした。

このように、月並俳句を打破しようとした子規を「現実を尊重した」点で、芭蕉と並べて評価している。そして、芭蕉―子規という現実尊重の態度の系譜の上に現在の「ホトトギス」俳人を位置づけようとしたものである。

ここで、誓子は、子規の「写生」について、「いきを写す」のではなくして「なまを写す」ことであるとし、アララギズムの「いきを写す」という「写生」に対して、子規の「写生」をそのままのすがたで継承したのが虚子であるとする。そして、そのことは「肝要なことである」としている。

これは、それ以前の俳論にも見られるように、子規の「写生」は、デッサンにとどまるもの、自然の忠実な模写のレベルであるということこ

とを、表現を変えて主張したものである。

## (5) 「俳句写生論の変遷（二）子規の写生論」

（昭和九年十二月）

この論文を書くにあたって、誓子は「俳句大要」（明治二十八年）、「松蘿玉液」（同二十九年）、「俳人蕪村」（同三十年）、「随問隨答」（同三十二年）、「墨汁一滴」（同三十四年）、「病牀六尺」（同三十五年）などを讀んだと記している。

まず、誓子は子規の「写生」について、

「子規自ら『写生は画家の語を借りたるなり』と云ひ、それを 中村不折・下村為山等の少壮画家の態度―たかだかクロッキイといふ程度の軽い意味に於ける―に学んだ」と述べ、「写生」＝「クロッキイ」ととらえている。そしてこのことを、アララギズムの東洋風な解釈の否定理由ともしている。

続いて、誓子は年代順に子規の写生論を考察している。

まず、「俳諧大要」（明治二十八年）の

「俳句をものするには空想に倚ると写実に倚るとの二種あり」の一文に対して、誓子は、

「空想と写実とへ等分に視線を送りながら、首鼠両端の煮えきらない態度を持してゐた」と批判。続いて、

「（子規の）リアリズムは、実はアイディアリズムと対立する程のリアリズムではなかった」

と述べる。しかし、子規のリアリズムは、

「明確なりアリズムに發展する萌芽となつたことは争ひのない事実であつて、子規がその為アイデアリズムからリアリズムを引き剥して、それを思ひきつて正面に打出したことは、何と云つても彼の卓見と称さねばならぬ」

と、「萌芽」という面での役割を評価している。

「俳人蕪村」（明治三十年）では、子規の「理想美」を強調する次の文章を引用し、批判の意味を込めて「意外な方向に転換して行つた」と誓子は述べる。

「文学の実験に依らざるべからざるは猶絵画の写生に依らざるべからざるが如し」。「然れども絵画の写生のみ依らざるが如く、文学も亦実験にのみ依るべからず」。「文学者の頭脳は四畳半の古机にもたれながら其想は天地八荒の中に逍遙して無碍自在に美趣を求む」。

さらに、「明治二十九年の俳句界」（前出）における子規の、  
「純粹の写生にも猶多少の取捨選択あるをや」

という記述や、「墨汁一滴」（前出）の

「虚子曰、今迄久しく写生の話も聞くし、配合といふ事も耳にせぬでは無かつたが、此頃話を聴いてゐる内に始めて配合といふ事に気が附いて、写生の味を解した様に思はれる」

という記述を引用し、

「一瞬当惑を感じざるを得ない」

と述べている。そして、このような子規の記述に対して、

「『写生』以外の領域と『写生』の領域とのひそかな結合が行はれそめた」

と否定的な意味で解説している。<sup>注10</sup>

誓子は子規の「写生」をクロッキー程度の「生を写す」と解釈し、句作態度としてのリアリズムと観念すべきであると考えている。表現のリアリズムは「客観的描写」と呼ぶのが妥当であるとし、

「子規の芸術上の功績は、この『写生主義』『客観主義』の二点に於て讃へられるべきもの」

との評価をしている。

そして、この「態度のリアリズム」と「表現のリアリズム」との間に「構成」の領域があるとし、自説を子規の評価に結びつけて説明しているのである。

#### (6) 「子規以後季題観念の変遷」（昭和十年十月）

この論文では、子規・虚子・乙字の季題についての俳論を採り上げ、  
たうえて、季題についての自説を述べている。

誓子は「はしがき」において、

「俳句の確立」「が十七音と季との離るべからざる結合の上に  
あつたかどうかといふことの究明に」「手を染めたのが実に乙字  
その人であつた。この点に関する子規並びに虚子の業績は比較  
的  
みすばらしい」

とまず前置きしている。その上で、子規の「季」についての批評が、  
次のようになされている。

「子規は一方に於て自由なる立場に立ち、季は古人の規則に拘泥することなく、須らく実際の感情に従ふべきことを述べながら、また他方に於ては伝統的な立場に立ち季の定めを以て分類上の便宜となすが如き不徹底な態度を示してゐる」。

さらに、

「季物は飽迄事實に即し、季節の推移に沿ふて起る現象そのものたらしめ、敢てこれに春夏秋冬の分類を加へざるところまで徹底しなければならなかつたのである」

と述べ、子規の「自由な立場」の不徹底さを批判しているのである。

#### (7) 「子規の俳壇時評」(昭和十年十二月)

誓子は、この時期において子規を次のように評価している。

「(六甲山にこゝろを遊ばせるとき)何時とはなしに子規居士のことを想ひ起すのである。その博識にして、高きを仰がれ、然もその常識的にして、多くの人々に親しまれてゐる点に於て。子規居士は近世に於ける偉大なる常識人であつた」。

そして、子規の博識を極めるために、いろいろな面から『子規全集』に親しんでいることを述べ、今回は子規を俳壇時評の面から評価しようとしている。特に、この稿では、

「現在の私にとっては、就中明治二十九年のものに酌めども尽きぬ興味がある」

とし、論文「明治二十九年の俳句界」に的を絞っている。この論文に対する誓子の子規評価は、次のようなものであつた。

「子規居士の新俳句運動は詩の低地にあつた月並俳句の地揚工事であつた」。「俳句が文学界へ進出せんが為に避くべからざりし軋轢を、当時日本が世界へ進出せんが為に已むを得ざりし日清戦争に擬へてゐる。旺なりと謂ふべきである」。

このように、大きく子規の運動を評価したあとで、

「現在に於けるわれわれの新興俳句運動もまた。詩の低地にある既成俳句の地揚工事である」

「子規居士は俳句界の進歩を『今迄曾て有らざるの変化』のうちこれを見んとした」。「今日われわれ新興俳句の作者の志向するところも、唯『古来在りふれた俳句』を『従来在りふれた既成俳句』と書き換へれば、全く同一の方向にはたらいてゐるのである」

とし、子規の運動に自分たちの新興俳句運動を比し、同質のものとの認識を示している。

その上で、

「単に俳句があるといふのではない。俳句が詩として、今日の生活に即した詩としてあるのではなくてはならない」

といった、誓子のいつもの主張をここでも説いたあとで、子規の革新運動と新興俳句運動の内容について、次のように具体的に述べている。

「今日われわれの新興俳句の句法と用語とには驚異に値するものがある。しかしながらこれとても子規居士の所謂、(1)古来ありふれたる五七五調に飽きて新調を得んと欲したること、(2)複雑なる趣向を詠ぜんとしたること、(3)印象を明瞭ならしめんとしたる

こと、(4)新事物を詠ぜんとしたること等の諸原因は悉く収めてそのうちに含んでゐるのである」。「われわれもまた『無上の楽』として新興俳句の進歩の為に、特異の句法と用語とに没頭するのである」。

最後に、

「然もわれわれの場合は新傾向俳句の再燃ではなくして、子規居士の俳句革新そのものである」

と述べ、新興俳句運動の性質を、途中で立ち消えとなった「新傾向運動」ではなく、子規の革新運動そのものであるとし、子規の革新運動を大きく評価しつつ、新興俳句運動の価値づけをしようとしていることが指摘できる。

## おわりに

誓子の子規理解の中で、「近代俳句は月並破壊の啓蒙運動によって樹立された。其の運動は子規居士によって代表される」という革新者としての評価は、ごく初期から一貫している。

子規の「写生」「俳句観念」「季」「革新運動の質」の項目別にまとめてみると、まず、「写生」については、「模写主義にすぎなかった」としている。誓子は子規のいう「写生」を「デッサン」「クロッキー」のレベルにとどまるものと認識していた。そのため、実践をすすめていくなかで、子規の「写生」観が幅と深みをもたせたものに

変化していったことに配慮せず、子規のごく初期の写生論を「写生」とし、クロッキー、デッサンのレベルにおいてしか理解していなかった。これは、自分の「写生」―「構成」―「客観的描写」という自説を主張するために、「写生」をデッサンレベルとして規定しようという意図があったためだと考える。

「俳句観念」については、「過去の滑稽趣味、閑寂趣味を一応清算した」との評価をしているが、「季題趣味の揺曳を標識として、季物と或る事象を配合せんとする観念」「を終に脱却し得なかった」ととらえ、「夕顔」論争等で主張している子規の「季題趣味」排除の考え方は認識されていない。

「季」については、「季感」を俳句の原動力としたこと、和歌より継承し、それを拡張深くしたことを評価しているが、「季語の連想」についての説明不足を指摘。また、伝統的な季の分類の立場に立ったところに子規の限界を指摘している。これは「季物は推移に沿ふて起る現象そのものたらしめ」という、現実尊重の自分の立場を明らかにしたものである。

「革新運動の質」については、「子規の俳壇時評」の中で、自分たちの新興俳句運動と対比させつつ、同質のものであると大きく評価している。この論文執筆時点は、誓子が「ホトトギス」を脱会した後であり(脱会は同年六月)、「ホトトギス」批判、虚子批判の意図も込めてなされた子規革新運動の評価であり、自分たちの新興俳句運動の正当性を主張する目的のためになされた子規の評価であった。

子規理解のうえで、誓子が最も批判的に受け止めていたのは、「写

生」であった。「クロッキー」レベルとして認識した原因について、虚子の次のような論文を読んでいたことが考えられる。

「(子規は)俳句は目で見た事、耳で聴いた事を其俣に叙する事が大事である、と大声疾呼して、俳壇を覚醒した」。「文章の上にも写生といふ事を主張して客観描写に重きを置いた」(「進むべき俳句の道」「ホトトギス」大正四年七月)。

この論文はのちに大正七年七月に実業乃日本社から単行本として刊行された。誓子の初学の頃、最も親しかった水原秋桜子もこの本を読み、興味を抱いたことを述べている。「俳壇の趨移を論ず」(大正十四年 前出)を執筆し、ホトトギス俳壇の流れを研究した誓子であるから、当然この本やこのような子規評価のなされた虚子の論文を誓子が読み、その解釈を吸収したことは考えられる。

虚子の唱導した「客観写生」から、逆に子規の「写生」の内容を限定していったのである。虚子の客観写生に対して、作者の主観を働かせることを主張した誓子は、写生と客観的描述の間に「構成」の領域を考えた。この「構成」の中で作者の主観が働くとした誓子にとって、「写生」とは、「クロッキー」程度のもので、自分の主張する「構成」とは明確に区別する必要があったのである。

子規の唱えたクロッキー程度の「写生」、そしてさらに虚子がそれを徹底した「客観写生」。ここにおいて主観の部分が失われてしまった現状の俳句を革新する意気込みで、自分たちの新興俳句を「子規の俳句革新と同質のもの」と俳句史に位置づけようとしたのであった。

その後、誓子は昭和十八年に『子規全集』を読破、同二十一年には

『子規諸文』を執筆している。戦争体験と病臥という暗い時期を送っていた誓子が、その時期に『子規全集』を読破し、どのように子規の理解を深めていったのかを明らかにすることを、今後の課題としたい。

注① この昭和十年頃までに、誓子はかなり子規の俳論に目を通していることが、誓子執筆の俳論からうかがわれるが、『子規全集』を読破するのは、昭和十八年である。

注②・⑤ 「私の俳句入門時代」(『俳句の復活』昭和二十四年 白玉書房)

注③・⑥ 「自叙伝」(『俳句』昭和四十四年十一月)

注④ 「小学校読本にある俳句」(『ホトトギス』大正九年一月)

注⑦ 「私の読書遍歴」(日本読書新聞 昭和二十八年二月十六日)

注⑧ 水原秋桜子の論文「自然の真と文芸上の真」は、昭和六年十月の発表である(『馬酔木』に掲載)。

注⑨ 大正初年、新傾向運動に対し、虚子が季題趣味を守ることがを説いた、その「季題」の尊重から導き出されたものである(松井利彦編『増補俳句辞典』桜楓社 昭和五十七年「花鳥諷詠」参照)。

注⑩ 子規の「写生」という語の示す内容が、虚子の時代には完全に句作態度・構成・表現に関するものにまで広がってしまい、写生論は俳句論そのものであったと批判している(『俳句写生論の変遷 三 虚子の写生論』前出)。

引用・参考文献

- 『山口誓子全集』 明治書院 昭和五十二年  
『子規全集』 講談社 昭和五十年  
『定本 高浜虚子全集』 毎日新聞社 昭和五十年  
俳誌「ホトトギス」 大正元年～昭和十一年  
松井利彦『近代俳論史』 桜風社 昭和四十年  
栗田 靖『山口誓子』 桜風社 昭和五十四年  
松井利彦『増補版俳句辞典 近代』 桜風社 昭和五十七年  
神谷かをる『山口誓子と古典』 明治書院 平成元年

（平成八年十月二十二日受付  
平成八年十二月二十五日受理）

柴 田 奈 美